

令和2年度
第61回 関東ブロック保育研究大会

主 題

すべての人が子どもと子育てに関わりを持つ社会の実現をめざして



新井 紀子 氏

保育しなの

発行所
(一社) 長野県保育連盟
長野市若里7-1-7
TEL026(228)4415
FAX026(228)9443
e-mail:kenhoren@khaki.plala.or.jp
https://horen-nagano.jp/
題字 海野会長

分科会 6月26日(金)

受付 午前9時

研究討議 午前9時30分

閉会 午後3時

基調講演

講師 国立情報学研究所教授

新井 紀子氏

テーマ

AIに負けない子どもを育てる

パネルディスカッション

パネラー 新井 紀子氏

ほか(選定中)

テーマ 新井先生に聞きたい!

AI時代の到来...

求められる資質・能力とは

社会の変化が激しく、未来の予測が困難な時代の中で、社会や人生を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにしていく資質・能力を持った子どもたちの育成が期待されます。

新井先生、保育関係者、行政、そして会場の皆さんと一緒に学び、考えたいと思います。

分科会

それぞれのテーマに基づく意見発表が、各都県・政令指定都市保育協会代表者から行われ、分科会助言者のアドバイスがあります。
また、全国保育研究大会の参加者が、選出されます(第1、2、5、8分科会)。

分科会	研究テーマ	助言者(所属)
第1	新たな時代の保育実践 ～すべての子どもにむけて～	井桁容子 (非営利団体コードミカタ代表理事)
第2	配慮を必要とする子どもや家庭への支援にむけて	下山真衣 (信州大学助教)
第3	保育者の資質向上を図る	若月芳浩 (玉川大学教授)
第4	地域の子育て家庭への支援の充実にむけて	太田光洋 (長野県立大学子ども学科長)
第5	子どものより良い育ちにむけた関係機関とのネットワーク	伏木久始 (信州大学教授)
第6	「食を営む力」の基礎を培う食育の推進	新海シズ (飯田女子短期大学教授)
第7	保育の社会化にむけて ～保育の営みをいかに社会に発信するか～	岡 健 (大妻女子大学教授)
第8	公立保育所・公立認定こども園等の使命と地域社会での役割	伊瀬玲奈 (和洋女子大学准教授)

特別分科会

助言者…碓井幸子(清泉女学院短期大学教授)
テーマ…あそんで あそんで 育つ子ども～今の保育それでいいの?～
信州やまほいく認定園の皐月かがやきこども園、雷鳥保育園を視察し、研究討議を行います。

(注) 第3分科会の助言者は、若月教授に変更になりました。



自然の中で遊び込む豊かな体験をめざして

～「トガリ山のぼうけん」の世界を友達と探究しよう～



木島平村 おひさま保育園 研究発表係

～ はじめに ～

木島平村おひさま保育園は、身近に自然が多く普段から戸外遊びを多くしている。しかし平成 30 年 4 月の年長児は、固定遊具で遊ぶ姿が多く散策のような活動を嫌がり、自ら遊びを見つけ、考え、作り出すことが苦手な様子が見られた。そんな頃に子どもたちは『トガリ山のぼうけん（いわむらかずお文・絵 理論社 全8巻）』と出会い、ストーリーの中に出てくる事柄に興味を持ち「知りたい」という思いから、自発的に行動を始めた。

そこで、木島平村のカヤの平高原を舞台にした『トガリ山のぼうけん』を題材にし、自然の中で遊び込み、遊びを発展させていく経験を十分にしたいと願い、記録をとりながら研究をしていくことにした。

『自然の中で遊ぶことを通して』

- ・ストーリーの内容から想像し、仮説を立てて自発的に行動する中で、自然の中で自ら遊びを作り出す体験ができた。
- ・友だちと活動を共有するために、話し合いの経験を重ねることで、自分の意見を主張し、相手の意見を認め合う姿への成長が見られた。
- ・子どもの活動に保護者も興味を持った。園から活動の様子を発信し、保護者と園とが、子どもの育ちの共有ができた。



『トガリ山づくりを通して』

- ・子どもの発想から発展し広がった活動は、無理のない異年齢交流へと発展した。また、全園児に喜んでもらえたことを感じられたことで、年長児は活動への達成感につながった。
- ・年長児が作った遊具で、保育士も遊ぶ姿があった。保育士は遊びを見守るだけでなく、子どもと一緒に体験する、楽しむ、共感することも重要であることを感じた。



『トチの実を使った活動を通して』

- ・子どもが自ら考え、自発的に行動することで、結果が分かった時の喜びは大きく、満足した達成感を得られ自信につながった。
- ・トチの実の葉やキーホルダーを作り、全園児に「プレゼントにしよう」と考えるなど、年長児として、小さいクラスの子を思いやり、気に掛ける姿が育ってきていることを感じた。



『ソリを作ろう!!』

子どもたちは、冬に手作りソリを作って遊びました。その時に使用した素材は、保育大会資料が入っているグレーの袋と同じ素材です。この袋に段ボール等入れ、口を閉じるとソリに加工することができ、雪の上、草の生えた土手で滑ることができます。その袋を加工し、保育にいかがでしょうか？

この袋の他の使い方を思いついた先生、是非、おひさま保育園にも教えてください!!



<おわりに>

木島平村の豊かな自然の中で遊び込む体験を十分にしたいと願い、一年間活動を展開した。『トガリ山のぼうけん』は身近で当たり前のように見ていた自然に、改めて目を向け、気付くきっかけを作ってくれたように感じている。自然の中からみつけた個々の興味・得意な場面の活動をきっかけにし、自信を持って発言し、行動することで、達成感、満足感が得られ、自己肯定感につながった。

子どもたち一人一人が自信を持って生活、活動ができる保育をこれからも考え、取り組んでいきたい。

第六十回

関東ブロック大会に参加して

伊那市美鷲西部保育園 園長 山岸 恭子

7月3日～4日に埼玉県さいたま市ソニックシティにて関東ブロック保育研究大会が行われました。関東一円の保育士や幼児教育関係者千名以上が集い、日ごろの研究を発表し意見を出し合い、研さんを積みました。

基調講演は、玉川大学教育学部教授の大豆生田啓友先生による「養護と教育の実践のもとに保育の質の向上を考える」というお話でした。今、保育を取り巻く大きな変化が起こっている。子ども主体の学びに代わっていかないと、日本が立ち行かなくなる。すべての子どもが社会の中で大事にされる社会を作るために作られたのが、新制度ということでした。乳幼児を育てる2つの視点として示してくださったことは、養護の大切さと教育の大切さでした。大人から受容的、肯定的、応答的に関わられた子どもは発達がいい。また、子どもが主体的、対話的にやり遂げたという達成感・成功体験（深い学び）は、子どもの良い発達につながる。「園で遊び込む経験」が多い子は、小学校

以降の「学びに向かう力」が高い。「一斉保育」よりも、子どもの主体性を重視して、遊びを中心にした保育を受けた子の方が語彙力が高い。など子ども主体の保育の大切さを改めて教えて頂きました。



また記念講演として、旭山動物園園長坂東元氏の「命の輝きを見つめて」をお聴きしました。様々な命を守るために努力されていることがわか

り、頭が下がる思いでした。

1日目の最後に次期当番県の挨拶ということで長野県保育園連盟の皆さんが県をアピールしてくださいました。準備等大変だと思いますが、実り多い大会になることをお祈りしています。

2日目は8分科会と1つの特別分科会に分かれての研究会でした。私は「食を育む力」の基礎を培う食育の推進というテーマの第6分科会に参加しました。私たちは「みんなで食べると楽しいね」体験を通して育む食への意欲」というレポートを発表させていただきました。発表後、分科会参加者から「自分の園でも取り入れてみたい」「地域を巻き込んでの実践がよかった」などの意見をいただきました。助言者のアミール喜代子先生からは、親子で取り組んだところが素晴らしい。「遊びから食育」はいい発想。とお言葉をいただきましたとても嬉しく感じました。

他に2つの研究発表がありました。新潟県高崎保育所の発表は、地元魚屋さんをお願いし、魚の解体ショーを園児に見せた、という発表があり、うらやましく感じました。千葉市のレポート委員は、保護者への家庭での食事についてのアンケートを基に

した発表でした。

午後は小グループに分かれての話し合いが行われました。日頃食育について困っていることを出し合いました。0,1歳児の離乳食、アレルギーへの対応、苦手な食材への取り組み方、食育活動の進め方、栄養士と保育士の連携についてなどを話し合いました。皆さんも同じような悩みを持つている、と感じました。

アミール喜代子先生の講評では少子化の進行、核家族、育児の孤立化、子どもの貧困、肥満児などの問題が顕著になっている。すべての子どもが健やかに育つ社会の構築のために、保育園でさらに食育を進めていってほしいとおっしゃっていました。

食物アレルギーに関しては、インターネット情報を信じて誤った対処をする保護者が増えているとのこと。保護者の方に直接伝えられる保育園でこそ、食育に取り組む必要性を感じました。貴重な研修に参加させていただきましたありがとうございました。

保育所地域子育て塾（東信地区）

乳幼児期から育む自尊心

～生きる力、乗り越える力～

日本ウエルネススポーツ大学教授
日本ののちの教育学会会長

近 藤 卓 先生

令和元年6月22日佐久市コスモホールに於いて、近藤卓先生をお迎えしての講演会が開催されました。

自尊心とは人に褒められたり、達成したものが認められたりすること、自分を大切に思う気持ちであること、そして社会的自尊心や基本的自尊心を育むために、私達は何が出来るのかを学びました。

◎自尊心とは何か

自尊心についての研究はウィリアム・ジェームス著『心理学の原理』1890年刊の公式定義より、「自尊心 (Self-esteem) は、「成功 (Success)」を分子とし、「要求 (Pretensions)」を分母とする割り算によって決定している。

この公式から自尊心は「成功」という結果に依存している値であるということ、人と比べて自分には価値があるかどうか、社会の中で優れているかどうかで決まってくる感情である。

◎自尊心の概念について

自尊心の概念は「社会的自尊心」「基本的自尊心」の二種類ある。・社会的自尊心は褒められたり、

認められたりして、成功体験を積み高まる感情である。優越感や人より優れている、他者との比較といった種類の感情が高まり、すごい自分、いわゆる「自信がある」状態になる。

社会的自尊心を熱気球でイメージすると、「頑張る」「褒められる」「認められる」ことがガスバーナーの熱風で熱気球は膨らみ舞い上がっていくが、成功しない限り保つことは出来ず、破裂や萎むなどの状態になる。人は社会の中で、自らの評価を求めて生きる欲求を持っているため、向上や挑戦するためには、社会的自尊心は欠かせない大切な感情である。・基本的自尊心は、成功や優越とは無関係に良いところも悪いところも含めありのままの自分を受け入れ、自分を大切な存在として尊重するものである。他者との比較ではなく、絶対的で無条件の感情であり、根源的で永続性のある感情である。

基本的自尊心は身近で信頼する人と体験を共有し、感情を共有することで形成されることが共有体験で、その時、その場で感じ合うことが、「体験の共有」と「感情の共有」である。

基本的自尊心を育むには、日常の何げない共有体験を地道に重ねることが必要である。また基本的信頼の獲得と無条件の愛によって、基本的自尊心の基盤がしっかりつくられていく。



◎自尊心の四つの型について

・子どもの自尊心を考える時には、社会的自尊心と基本的自尊心の二つの領域の特性を知り、注意深く見ることが大切である。また、社会的自尊心と基本的自尊心のバランスから、次の四つの型に分けて整理することが出来る。

・SBタイプⅡ大きく安定した自尊心。何があっても大丈夫、立ち直れる。自尊心の二つの部分がバランスよく形成されている。

・sbタイプⅡ低く安定した自尊心。のんびり屋のマイペース。社会的自

尊感情が育っていない。

・sbタイプⅡ低くて弱い自尊心。さびしくて孤独、自信がなく不安。自尊心の二つの部分が両方とも育っていない。

・SbタイプⅡ肥大化して不安定な自尊心。頑張り屋の良い子、不安を抱えている。社会的自尊心が肥大化している。

◎自尊心研究から見てきた課題

・いじめ（子ども同士・パワーハラスメント・家庭内の虐待）

・ASD（急性ストレス障害）

・PTSD（心的外傷後ストレス障害）

・PTG（心的外傷後成長）

子ども達が生きる上で重要な基本的自尊心は、家庭での乳幼児期の育ちである「愛着形成」「母子相互作用」などを通じた情動の共有体験や保護者が一緒に共有体験を積み重ねながら、日常生活の中で繰り返し行っていくことで育まれることを学びました。私達保育士は乳幼児期より子ども達と保育園での関わりをもつ中で、生活や遊びの場で多くの共有体験を毎日行っていることに自信と誇りを持ち保育を進めながら、保護者にも共有体験の大切さを啓発していきたいと思えます。近藤先生の優しいお人柄と巧みな話術に引き込まれると共に、明るく元気な歌声とギター演奏に魅了された講演会となりました。

保育所地域子育て塾（南信地区）

幼保小連携に基づく接続期カリキュラムと遊びの持つ意義について

—子どもと遊びをつなぐ生活科と接続期カリキュラムの意義と作成ポイント—

上越教育大学教職大学院 教授 木村吉彦 先生

南信地区子育て塾が、7月6日茅野市民館に於いて、木村吉彦先生をお迎えして開催されました。

木村先生から、遊びの意義、幼児教育と小学校教育の違い、それをつなぐ接続期の大切さについてお聴きし、今私たちがすべきことを示唆していただきました。

遊びとは、自分で見つけた課題を自分なりの方法で、自分の力で実現・達成することのできる活動（体験）である。そこでは、自己選択・自己決定・自己実現の機会がふんだんに与えられ、「やったあ」「ほくもやればできる」という達成感・自己肯定感が自分づくりの原点である。自分づくり、すなわち「主体性」の源の提供、「主体性の確立のチャンス」の提供、これが遊びのもつ一番の意義である。

一方、「小学校学習指導要領」の国語で言えば、漢字を「一年生ではこれだけ覚えなさい。」というように、課題は自分で決められない。覚える内容が最初から決められていて、

常に外からの課題としてやってくる。その課題に自分はどう対応するのか

が求められる。「外からの課題」に応える力の前提となる「内なる課題への対応力」をつくるのが幼児教育の遊びであり、生活科の遊び的要素であり、そこではぐくまれる主体性である。自分の課題を自分で決めて、その実現に邁進、努力する。その経験の積み重ねが、やがて、外から与えられた課題にも対応できる力へとつながっていく。

このような自己実現の体験が、五歳児と小学校一年生に最も必要とされる学びの内容である。

アプローチカリキュラムでは、小学校との交流や行事参加、一日入学だけでなく、話し合いや友達の前で自分の考えを語るような集団活動、集団遊び、椅子を用いた活動、午睡をなくしたり、昼食時間を小学校に近づけたりする等、幼児教育の本質に基づく「生活リズムの変化」を提示していく。

そして、スタートカリキュラムに

において、幼児期の遊び的要素と教科学習の両方を組み合わせた合科的・関連的な学習プログラムを行うことにより、「明日も学校に来たい」という意欲をかき立て、幼児期から小学校教育への円滑な接続をもたらし、小学校へのスムーズな「適応」を促してくれることが期待されている。

スタートカリキュラムの中核を担う生活科は、幼児教育と小学校教育の両方の性格を併せもつ教科であり、幼児期の学びと一年生の学びをつなぐ幼保小連携の鍵を握る教科である。



遊びの中で得たさまざまな資質・能力は、小学校以降の教科学習に必ずつながる。

保育士は、自らやってみようとす

る子どもの主体性を重視し、自分達で経験し、満足感や達成感が得られるようにしていくこと。また、相手意識を重視し、意見の食い違いや行動を責めず、お互いの良さを感じられる機会を大切にすること。それらから得られる自己肯定感が自信につながっていくからである。

すべては子どもたちのために

“Teacher”もついで

“Educator”をめざしましょう

日本語で「教育する」と訳されるeducateの元々の意味は、「引き出しを開ける」という意味。幼児教育・保育を初めとして、生活科や総合的な学習で最も大切なことは、子どもの思いや願い、興味・関心、意欲、好奇心、探求心、自己表現力等々、これら全てを「引き出してあげる」姿勢である。「教える」のみでなく、「子どものもつ可能性を引き出してあげる」心構えが大切である。

入学児童はゼロからのスタートではない。幼児教育・保育者は自信を持ってください。と結ばれました。

幼児期の「遊び」が重要であることを再認識し、子ども達が自己実現体験をしつかりとできるような環境を整え、“Educator”をめざし保育を進めていきたいと思います。

保育所地域子育て塾（中信地区）

A I時代を生きる子どもたち

～保育の内容・方法を見直すことの大切さ～

（二社）家族・保育デザイン研究所 代表理事 汐見 稔 幸

中信地区子育て塾が、6月29日に安曇野市豊科公民館ホールに於いて、汐見稔幸先生をお迎えして開催されました。

二〇年後、現在保育している子ども達が社会人になる頃には、人間が苦勞してやってきたことを人工知能（コンピュータ）が代わりに行うA I社会になってくる。この二〇年後の社会にどう人間らしく生きていくかを考えたい。

我々が受けてきたのは受験のための教育で、正解や解き方を覚えていくかをテストする二〇世紀型の教育。これからは、議論する力や相手の意見を深く読み一緒に答えを作っていくコミュニケーション力を育てていく二一世紀型の教育に、日本だけでなく世界中が二一世紀バージョンに変えようと必死になっている。これに早く成功した国が勝つとも言われている。

これから訪れるA I時代とは、人口知能が生活の隅々にまで入り込んだ社会。A Iが機械や物に組み込まれ、これまで人間が行ってきた判断

や思考、操作も自分で行うようになる。生活はより楽になり早くなる。また、医学の進歩と相まって寿命がさらに伸びる。しかし反面で、①身体を使って用をたし、身体にいろいろなワザを刻み込んで成長していくこと。②懸命に考え相談し、アイデアを出すことを喜びとすること。③直接人と関わり関係を大事に楽しむこと。これら人間がこれまでこだわってきた3つの事をしなくてすむようになり、楽さを求めて生きがい失ってしまう。

A I社会で人間らしく生きるためには、赤ちゃんの頃から人と直接関わる、自分で作る、皆で作る、身体にいろいろな事を覚えこませることを喜びにする、などの手作りの世界を豊かに持つていること。特に幼い頃から次の3つが大好き！と育てることを大切にしたい。①身体を使うこと、身体に文化を刻み込んでいくこと。②頭を使い皆でワイワイ適切な解を創造すること。③人と直接関わりワイワイすること、人の世話をすること。もう一つ、点数≠偏差

値を上げれば人生何とかなる時代ではなくなる「自分はこれが好き、得意！」というものを持っていることが大切。そのために、子どもの頃に好きなものを探す、探させる子育て、教育を。我々は、子どもの自分探しの応援団になつていこう。

二一世紀は、経験したことのない問題が次々と起こるとされている。昨年の出生率は、1.42、親の0.7倍しか生まれていない。このペースでいくと、千五百年後日本人は一人になる。文明や制度は人口増加、またはキープを前提とし作られているが、これから日本は一年で百万人ずつ減っていく。この右肩下がりの経済減速の社会に、どう元気で豊かに生活するかを考えていくかが大きなテーマである。

A I時代の新しい教育では、身体を使うこと、頭を使うこと、人と関わること、この3つが大好きという保育をしていこう。これは今までやってきたことそのものだが、これからはこの意味がもっと大きくなっていく。この3つを細かく書いていくと、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿になる。認知的スキルも大事だが、子ども達が全く外で遊ばなくなり、かつてはいつの間にか身につけていたコミュニケーション能力や簡単には諦めない気持などの非認知的スキルは、意識的に育てないといけない時代になった。そこで、これからは非認知的スキルを育てるような保育に切り替えてほしい。長野で行われている自然保育は育てる宝庫である。

最後に、10の姿は、こうしなくてはいけないという目標ではなく、いつも頭において保育してほしい。これらを丁寧に行うことで保育の質を上げていくことがこれからの課題である。「どうか皆さん頑張ってください。」汐見先生からのエールで講演会は締めくくられました。



保育所地域子育て塾（北信地区）

子どもの遊びと学びを支援する専門家になる

信州大学教職大学院 教授 伏木久始 先生

信州大学教授であり長野県教育委員会教育委員としてご活躍の伏木久始先生を講師にお迎えして開催されました。

中学校教師、心理カウンセラーをされる中で「学校って変だな」「なぜ学校にいけないのか?」という思いから教育学を学び直され、小、中、高、大学の中での幼児期の大切さ、保育士の大変さについてお話しをしていただきました。

一、現代の子ども達は、親世代の子ども頃とは全くの異文化を生きています。生まれた時から何でもあり、タブレットやアプリを使いこなし、他国と比べて就寝時間が遅い。

◇欠乏体験を奪われた子ども達は、自分で考えることができなくなっているのではないか。

・保育園で使うものを人数分より少なくしてどうしたら良いかを考える機会を作る。ケンカをするかもしれないし、譲り合うかもしれない。

昔に戻ることはできないけれど、自分達で考え出したことを大切にすることはできる。

◇総務省が進めているソサエティ5.0の時代へ・冷蔵庫にAI機能

・オンライン診療 ・会計クラウド

・無人の耕運機 ・無人走行バス
これらによって新たな社会へ:

○社会適応から社会創造へ

20年後47%の職業が自動化され今は存在していない職業が出てくるが、保育士の仕事はなくならない。

○知識習得型から知識活用型へ
二、幼児教育への新たな要望

「何を学ぶか」から、どんな力をつけるのか、どんな人間を育てるのが強調されていくようになる。

・知識や技能

・思考力、判断力、表現力

・学びに向かう力、人間性

この3つの柱が、学習指導要領改訂の骨格であり学校教育の基本である。

これとリンクするように保育所保育指針が改訂されている。

◇非認知的能力を高める保育とは?

認知的能力は、数値で表せるが、非認知的能力は、主体性、実行力、共感性、探求心、道徳心、自己肯定感等、数値で表すことができない。

幼児期に培うことが重要であり、この両方を一緒に高めていくことが大切である。

○蚤は、体長の数千倍程のジャンプ力を持つが、容器に蓋をするとすれすれの高さまでを学習する。この例から環境によって保育士の都合の良い枠組みを作り子どもの可能性を制限しているのではないか。自分はどんな保育士なのかを考える必要がある。

○幼児教育の中の「遊び」について

・自ら選んでする活動
・遊ぶこと自体が目的

・その活動が楽しい

・自ら楽しいと感じてする活動

この4つが条件であり、遊びに打ち込んでいるその子どもの中に何が起きているのかを、職員が語り合い共通の理解を深める。



○幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿とは、卒園までに身につけるものではなく、幼児期に夢中になれることを保育士が応援し、今この芽が伸びている、力を発揮している、という指標とする。

三、海外の先進的な保育実践に学ぶ
・デンマークでは、あなたはどのようなの? 自己決定をする。

・ニュージーランドでは、遊びそのものはきれいである必要はない。

・フィンランドでは、平らな園庭はない等、多様な保育実践がある

○自分の器に入らない子どもに気付く、器から飛び出していこうとすることを認めるくらいの気持ちを持つ。

四、子どもの遊びと学びを、どう捉え、どう見ているか

◇保育士が心掛けたいこと

・私達の見方には限界があることを自覚する。(例) バスケットボールのゴール下を歩くゴリラの着ぐるみに気づかない。

・子どもの事情を理解できていない可能性を考慮する。

・自分とは異なる個性的な人格として子どもを尊重する。

◇安心感と自己肯定感を育むには、あなた自身が、遊びを楽しみ、学びを深めようとする生き方!

伝統の忍者遊びの中で育つもの

静か
の術

佐久市立泉保育園 保育主任 福島 智美



佐久市立泉保育園は、上信越道佐久南インターの東に位置しており、周りには雄大な浅間山、蓼科山が広がり四季折々の自然の変化を身近に感じることができます。また、保育園の近くには貞祥寺を始め、お寺や神社がいくつもあり、田んぼ道を通りながらのどかな環境の中、子ども達は散歩を楽しんでいます。

泉保育園と言えば「忍者遊び」が伝統となっており、今から二十年以上も前から継続している遊びで、子ども達にはなくてはならない活動になっています。忍者遊びの始まりは、田んぼの藁でかくれんぼをしたり、藁の剣作りをしたりして遊んだのがきっかけになっています。子どもから生まれた子ども主体の活動が現在も継続されているのです。

忍者遊びの舞台の場は、保育園の近くにある前山城があった場所で、「城山」と呼ばれています。この城山への登り口は三か所あります。絵本「三匹のやぎのがらがらどん」に出てくるトロールの橋を思わせるトロール道。

りんご畑の横を通るりんご道。昔、登り口に山羊がいてその山羊の名前からつけた、しずか道。子ども達から名づけたこの三本の道はどれも素敵で、登りがいがあります。子ども達は城山が大好きで、忍者になりきって遊び込んでいるのです。三歳以上児がこの城山で忍者遊びをするのですが、木の根を手がかりに全身を使っている。「地獄の崖のぼり」、下って登る「ジェットコースター」、木の根にロープを巻きつけて登る「ロープのぼり」などは達成感とスリル満点の遊びになっています。子ども達の冒険心を膨らませてくれます。また、城山に住む大忍者さんからの手紙も楽しみにしていて、「今日は忍者さんから手紙が届いている！」とワクワク期待し、時には子ども達からも手紙や返事を書き、やりとりを楽しんでいます。また頂上から見ると景色は最高で、浅間山や佐久平の素晴らしい眺めに心も和みます。頂上は平らになっているので、そのまわりで、子ども達の名づけた遊び場が広がっているのです。



秋には、あけびや、どんぐり、松ぼっくりなどの木の実がたくさんあり、自然の恵みを体中で感じることが出来ます。その中で、毎年恒例行事の「親子城山修行」を行い、親子で山遊びや忍者遊びを楽しみます。普段子ども達がどんな遊びをしているのか知ってもらうチャンスでもあり、一緒に遊びを体験することで触れ合いも広がり、楽しさを共有することが出来ます。山遊びは子ども達の心を開放し、感性豊かな心を育んでくれます。そして、この城山での遊びは、毎回新しい発見や感動があるのです。親子・友達とおもいきり自然の中で遊んだ体験は、きっと一生の宝物になることでしょう。

忍者遊びは、日々の生活にも修行というかたちでつながっています。お話を聞く時は「静かの術」、散歩の

時は「身を守る術」、母忍の作ったおむすびを食べる時は「腹ごしらえの術」など他にも様々な術があり、素敵なネーミングで子ども達に浸透し、遊びに生活に結びついているのです。忍者遊びを通して子ども達は、自ら考え動き出せるようになってきており、生活面でも保育士に指示されることなく自主的に行動できる子どもが増えてきています。



泉保育園では、素晴らしい伝統の忍者遊びをこれからも継続していきたいと思っています。そして、新しい発見をしながら、保育士も忍者遊びや忍者修行を楽しみ、さらに環境の工夫をしながら遊びを発展させて、子ども達の成長を見守っていききたいと思っています。

挨拶ができる子どもを目指して



富士見町 本郷保育園 主任保育士 塩沢 千尋



諏訪郡富士見町は、北に八ヶ岳、西に入笠山と山々に囲まれ、山梨県との境に位置し、のどかな農村地帯にあります。

本郷保育園は、3世代や4世代の大家族の中に暮らしている家庭も珍しくなく、明るく人懐こい子が多いです。しかし挨拶をしても恥ずかしくてできなかったり、返事がなかったりする姿も見られます。また自分の気持ちをうまく伝えられない、素直に甘えられない等、自分の気持ちを言葉で表現する力が乏しい子どもも多く見られます。そこで、言葉による伝え合いの原点として、まず日常の挨拶を大切にしたいと考えました。子ども達に「挨拶はどうしてするの?」と聞くと難しいのか返事があるかもしれません。「挨拶をしてもらえるとどう?」と聞くと「嬉しい」と返ってきました。「保育園の中でもっと挨拶をして、みんなが嬉しい気持ちになつたらいいね」と挨拶運動をすることにしました。次の日から年長児が玄関に立ち、『笑顔で』相手に

聞こえるように大きな声で『目を合せて』を合言葉に、挨拶運動が始まりました。中には嫌がる子もいたので、無理強いはせずに進めました。



また子ども達のやる気上がるように、そして周りの人にも何をしていくかわかるように、『あいさつでなかよし』と書かれたタスキを掛けて行いました。子ども達が「おはようございます」と挨拶をすると、保護者の方も自然に「おはようございま

す」と返してくれます。「大人の方がしないですよね」と話す保護者もいて、挨拶に対して関心が出てきた様子が伺えます。毎日続けていると自然と笑顔になり、園の雰囲気も明るくなったように感じます。子ども達から、「ドキドキした」は「ずかしかった」涙が出そうだった(嬉し涙)と色々な感想が聞かれました。体験する中で保護者も含め、各々に感じる事があり、挨拶をする事、挨拶を返してくれる事の気持ちよさや嬉しさが、少しずつ子ども達にも伝わってきているように感じました。

挨拶運動はどんな広がつて年長児は自分のタスキが欲しくなり、年中・年少児の分も一緒に作ってプレゼントしてくれました。そして自主的にタスキを掛け、登園する友達やお家の人に元気よく「おはようございます」と挨拶。登園してきた子はニコニコしながら笑顔で返す。挨拶してもらったその子がまた挨拶運動に加わり、友達と一緒に挨拶をする。挨拶の輪はどんどん広がっています。年少児は特にやる気満々で挨拶する事ができ、「あの子もあんな大きな声で挨拶ができるんだ」ととても微笑ましく嬉しい朝のひとときです。



ある日、中学校の先生が保育園を訪れた際に、「本郷保育園の子ども達は、きちんと挨拶ができて素敵ですね」と嬉しい言葉をいただき、挨拶が身に付いてきていると実感しました。人とのコミュニケーションは挨拶から。いつもどんな時も挨拶ができる素敵な人になってほしい。そして自分の気持ちを言葉で伝えられ、相手の気持ちが理解できる人。自分の周りの人と心を通わせながら、健やかに成長してほしいと願っています。

四季折々の中で

小谷村 小谷村保育園 園長 松澤 由佳



小谷村は、長野県の最西北部に位置し、南は白馬村から姫川に沿って、国道一四八号線が糸魚川へと走っています。村の面積の八割を森林が占め、耕地はわずかに二割弱と少なく、姫川とその支流に沿って五十三の集落が散在しています。人口は約三千人という小さな村で、高齢化率約三八パーセントという現状にある中、子ども達は『村の宝』として愛情いっぱい地域の方々に関わって頂いています。子ども達は厳しくも豊かな自然と関わりながら、日々散歩や戸外遊びを通して、四季折々の変化を五感で感じています。

『春』厳しい冬が終わり暖かな陽射しがふりそそぐと、少し遅めの春がやってきます。春さがしに出かけ、小谷の春一番となる『ちゃんめろ』（ふきのとう）を見つけ、「ひらいたちちゃんめろじゃなくて、つぼみの方がおいしいんだよ」と年長組の女の子が自信満々に周りの子に知らせている姿が微笑ましいです。摘んできたちゃんめろは、食材として調理されます。裏山でわらび採りもします。急斜面に足をぐっと踏ん張り、採る姿は立派

なものです。田んぼには大好きなおたまじやくしが姿を見せてくれます。始めのうちは触る事すらできなかった子も何度も足を運ぶうちに『先生見て』と嬉しそうに手ですくったおたまじやくしを見せてくれます。



『夏』避暑地としての村ですが、温暖化により都会と変わらない気温になる事もあります。それでも山から吹く風は心地よく、子ども達にダイナミックな活動をさせてくれます。専用の服に着替え、園庭で体中泥んこになって遊びます。汚れることや感触を嫌がっていた子も、友だちと関わっていく中で少しずつ遊びの楽しさを知り、自ら活動を楽しめるようになります。一人の遊びから友だちとごっこ遊びへと広がり『先生、今日泥んこできる？』と朝の挨拶と同時に聞いてくるようになります。この時期はかなへび探しにも夢中です。早い動きをよんで捕まえ、クラスで飼育

していく中で新しい生命の誕生を身近でみることが出来ます。愛おしく大切に世話をしている姿が、人を思いやる心や、命の大切さを学ばせてくれているのではないかと思います。

『秋』秋の実りを探しに園外へと出かける機会も多くなります。地域の方々に見守られながら『待っていたよ』と温かな声を掛けて頂いています。『秋の雲だ』と子ども達も季節の移り変わりを感じ、言葉で表現してくれます。園の畑でたくさん野菜を育てています。畑の周りは珍獣だらけ。毎年、知恵比べとなり『かかしを作ろう』『おぼけを作って来ないようにしましょう』とアイディアを出してくれま

す。地域の方々と大根作りをし、収穫します。自分の身丈の半分程ある、大きな大根を抜き、土だらけになりながら運ぶたくましい姿が見られます。おじいちゃんがある場所で切ってくれた採れたての大根を大きな口を開けてかぶりつけることは、なんて幸せな光景かとありがたく思います。



『冬』園庭の雪は、一階部分が全て雪でおおわれ、屋根と同じ高さになります。毎年その場所で雪上運動会を行います。綱引きに、スノーフラッグ等々、縦割りチームで競います。異

年齢が関わり合いながら楽しむひとときは、いつもと違う雰囲気味わえます。又、裏山に肥料袋を持って尻ぞりにかけます。始めのうちは足が滑って登れず、泣いたりイライラもしますが、慣れてくると、足の指に力を入れてしっかり登れるようになっていきます。上に着くと肥料袋をそりにして、スピードに乗って滑り降りる姿に、ドキドキ感が伝わってきます。汗をかき夢中になって遊ぶと、頭からゆげがでていることも『機関車トーマスみたい』と大笑いし合うこともあります。

子ども達は自然と関わりおおいに遊びを楽しんでいます。保育士として子ども達の声に耳を傾け、共感し生きていく力の根っこを育てる保育を目指していきたいと思えます。一年を通して園の周りや村内の様々な場所に出掛け、見たり触れたり感じたりする体験を大事にし、益々小谷を愛する『小谷っ子』に育って欲しいと願っています。



みんなと関わりの中から育ち楽しむ



千曲市 あかね北保育園 副園長 松本 かつ子



千曲市は長野県北信地域の南東部に位置し、西は冠山(かんむりやま)東は、鏡台山をはじめとする山地に囲まれ、そのほぼ中央を東南から北東に大きく曲がりながら千曲川が流れています。あかね北保育園は棚田で有名な姨捨が見えます。先日、「先生、にじだよ」登ってみたいな「こんどのぼるんだ」と東の山を指差し思いを伝える子。七色に輝いた虹がきれいに円を描いて、のどかな風景でした。

この秋、園庭で運動会を行い、大勢の前で成し遂げた達成感が自信になり、ますます活発にからだを動かす子ども達。虫探しやボール遊び、鬼ごっこなど楽しむ中、年長は側転したり、けんけん跳びで鬼ごっこしたり、なわとびをしたりして遊んでいます。当園では年少になると週に一回体操の専門の先生が来園し、体操指導をお願いしています。年間を通して年長まで行います。どんな動きから体幹がつくか、安全に補助するために保育士はどんな動きをした方がいいのか、相談しながら行っている。

ます。元気いっぱい男の先生が「おはようございます、おねがいします」とあいさつすると、何かが始まると、興味津々で集中しています。先生の動きを真似て頑張る子、思うように動けない子が友達に刺激を受け励まされ、褒められ、認めてもらえることがうれしくて何度も何度も繰り返す中で自信がついているようです。年に一度の運動会では日々の成果を披露します。年少は跳び箱のやまのぼりジャンプ、平均台の橋渡り、ループのうさぎジャンプ、トンネルくぐり、マットで前回りをしてゴール。集中し真剣に取り組んだり、ここにこと笑顔でお母さんに手を振っていたりと、自分ペースで楽しんでいます。



んもうちよつとひっぱって」そうそう「もつとおおきくなるかも、せいの一って言うおう」なるほど、ほんとうだね」と、何とかして大きく膨らませようと考えています。そんな頑張りが実り本番ではきれいに膨らみ歓声が上がりました。年長は子ども達の好きな昔ばなしをテーマに動きを取り入れた組体操をしました。全員一列に並んで「おむすびを転がしてみたり、二人組でさるかにがっせんの栗を組んだり、三人組で金太郎でポーズしたり、3匹のこぶたではわらの家、木の家、レンガの家、それぞれを組んで表現したり、がらがらどんでんではトロールの渡る一本橋を作りました。組体操の間にパラウエーブを取り入れ、子ども達の好きな曲で踊り園庭いっぱいにかけ声も響き、楽しんでやる姿を披露しました。一つ一つの決めポーズに拍手をもらい、嬉しそうに堂々とする子ども達の顔は、やり遂げた自信にあふれていました。リレーではグループごとメンバーを変え、子ども達なりの工夫で繰り返し行ってきました。バトン渡しに難しく「はい！ っていうから走って！」「うしろむいて取って！」「○○ちゃんつてよぶから」と、それぞれ、考えてやっていました。途中転んでしまったり、バトンを落



とすハプニングもありました。ゴールまで何があるか分かりません。お互いの応援にも力が入ります。負けてしまったチームの友達が悔しさで泣き、傍で声をかけ慰め、一方では、一位になりグループで手を取り合い喜ぶ姿がありました。それぞれの健闘を拍手で迎えます。運動会ではこれまでの成果を披露しますが、その後も体を動かすことの楽しさや面白さを体験して欲しいと思います。みんなに関わり、でたヒントから、工夫し考え動いて試してみる、いろいろな失敗の中から見つけ出す経験も体全体で味わって欲しいと思います。一人一人の思いを出し合い関わり、見つけていく中で子ども達の力の支えになればと思います。



**第59回長野県保育研究大会の
中止について**

令和元年10月12～13日に、木島平村で開催を予定しておりました長野県保育研究大会は、台風19号の接近・上陸が予想されたため、中止とさせていただきますました。県内の保育関係者が一堂に会し、保育を取り巻く様々な課題について研究協議を行う貴重な機会であり、心からお詫び申し上げます。また、長野市、千曲市をはじめとして保育園にも多大な被害が生じており、被災された皆さま及び関係の皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

本大会開催にあたり、開催地木島平村をはじめ多くの皆さまに多大なご協力、ご尽力をいただきましたこと、深く感謝申し上げますとともに、厚くお礼申し上げます。

来年度は、小諸市において第60回大会を開催すべく準備を進めております。今回の分も合わせて充実した大会となるよう努力してまいりますので、よろしくお願いいたします。

長野県保育連盟

会長 海野 曙光

**関東ブロック保育研究大会の
参加者について**

関東ブロック保育研究大会には、県大会の分科会の発表者から2園（グループ）を選定し、参加しています。

今大会は中止となり発表ができませんでしたが、レポートの評価により参加者を選定しました。

第1～5分科会からは、茅野市立泉野保育園（テーマ…豊かな自然環境の中で共に育つ子ども達を願って）が、5人の助言者の評価により選定されました。

第15分科会からは、小諸市さくら保育園（テーマ…地域の特色を活かした保育から、保育の社会化に向けて）が、助言者及び司会者の協議により選定されました。

2園は、来年の関東ブロック保育研究大会（長野大会）に参加することになりました。全国大会の出席に向けて、頑張ってください。

全国保育研究大会の参加者について

全国保育研究大会には、関東ブロック保育研究大会の発表者から選定され、参加します。

7月に開催された第60回関東ブロック保育研究大会（埼玉大会）において、本県から参加した長野市立安茂里保育園（発表者…宮澤美保さん、坂戸

仁美さん、テーマ…家庭と専門機関をつなぐ架け橋として）が全国保育研究大会に出場することに決定しました。

大会は11月13～15日に広島市で開催されました。次号で全国大会の状況を報告していただきます。

保育功労者表彰**長野県保育連盟会長表彰**

（敬称略）

飯田市 飯田子供の園保育園主任保育士

宮下 京子

茅野市みどりヶ丘保育園長

牛山 まきみ

上松町教育委員会教育次長

森山 文子

以上3名の方が、保育事業の推進に寄与し、功績が顕著であることから表彰されました。心よりお祝い申し上げます。

災害見舞金制度について

このたびの台風19号においては、県内保育園等も多大な被害を受けました。被災されました保育園、関係の皆さまに心からお見舞い申し上げます。こうした状況を踏まえ、会員保育園等の支援のため、災害見舞金制度の創設を検討することになりました。今後、正副会長会、理事会で協議してまいります。

編集後記

台風大雨により被害を受けた皆さまに心よりお見舞い申し上げます。

いつ起こるかわからない自然災害の怖さと、子どもの命を守るため、どういう状態にあっても、職員一人一人が的確に動くような安全確保体制づくりについて、改めて考えさせられました。

十月から幼児教育、保育の無償化が始まりました。子育てや保育を取り巻く環境は変化していますが、子どもたちの命を守り、一人一人の子どもの最善の利益の保障のための取り組みは変わらないことはありません。

近年3歳未満児の利用者が増えています。温かく丁寧な保育と受容的で応答的な保育について職員間で検討し、緩やかな担当制を設けました。生活の場面で特定の保育士とゆったりと関わり、情緒的な絆を深めること、愛着形成を大切にしています。愛着関係がしっかりなされ、自己肯定感を育んだ子ども達が、主体的に自分で考え、自分で決めることができるように実践を重ね、保育を振り返り、継続して考えていきたいと思えます。

広報委員